

## タイトル

「CHAIN CUTTER ～人が人を裁くには…～」

ジャンル: 裁判劇

上演時間: 約2時間

## 登場人物

三田 健一(47)裁判員1号。サラリーマン。

須藤 真澄(34)裁判員2号。主婦。

加藤 美樹子(42)裁判員3号。占い師。

林葉 亮太(22)裁判員4号。フリーター。

太田 麻衣子(25)裁判員5号。OL。

岡本 勇次(36)裁判員6号。カウンセラー。

中谷 悟(48)判事。裁判員制度反対の判事。

藤井 俊也(37)判事。おべんちゃら判事。

河合 千秋(31)判事。正義感あふれる判事。

保坂 恵美理(24)被告人。『WHITE DREAM』ダンサー。母からの虐待を受け続けていた。

三崎 優香(26)証人。『WHITE DREAM』で、恵美理の後釜を狙うダンサー。

島本 由美子(44)弁護士。

石川 和馬(38)検察官。

渡辺 聖子(26)裁判所所員。

クラブ『WHITE DREAM』女性ダンサー5名。

男: 6名

女: 13名(内ダンサー5名)

計19名(内ダンサー5名)

## 本編

### プロローグ

明るく楽しげな客入れ用の音楽が、徐々にF・O。

同時に客電の明かりがF・Oしていく。

明かりが消えきった一瞬のちに、突然きらびやかで華やかな明かりが入る舞台。

クラブ『WHITE DREAM』。

すぐに大音響で音楽が流れ出し、保坂恵美理(24)、三崎優香(26)他5名のダンサーが、恵美理を中心に華麗に踊り始める。

突然曲の途中で唐突に明かりが消え、薄暗い中でダンサー達ストップモーション。

音楽だけは高音響で鳴り続けている。

舞台は2階建てになっており、2階部分に2人の人間が揉み合うようなシルエットが映る。

一瞬の後、片方の人間が絶叫と共にシルエットから消え、もう片方の人間の手だけが、取り残されたようにシルエットに映し出される。

ダンス曲終わりでシルエットも消える。暗転。

## 第一幕

暗闇の中で、男の声が聞こえている。

男(声)「裁判員の皆さん、これで本件の審議は全て終了いたしました。これより皆さんには、評議室へ移動して頂き、評議を始めて頂くわけですが、裁判員制度が導入されて間もない事もあり、皆さん方の中には、責務の重大さに不安を感じていらっしゃる方もあれば、お仕事の事情やその他の理由で、早々に終わらせてしまいたいとお考えの方もいらっしゃると思います。しかし皆さん！ これだけはしっかりと理解して頂きたいのです！ あなた方の評決が、1人の人間の、これからの人生を決定するのです。その事だけは十分に理解し、責務を全うして頂きたいと思えます！ …よろしいでしょうか？ …それでは、皆さん一人一人が持つておられる健全な理性と常識を十二分に発揮し、率直に意見を交換し合い、個人の偏見に囚われず疑問を解消し、最良の結果を導き出されることを期待します。…なお、評決は全員一致でお願い致します。…以上です。どうぞ評議室へご移動下さい」

明かりC・I。

東京地方裁判所、第一評議室。

上手に2階への階段があり、上手奥にはお茶やコーヒーのペットボトルが置かれている小さなテーブルある。

中央奥にはトイレに繋がる入口があり、上手手前にはホワイトボードが一つ。そこには事件現場の見取り図と、人物の位置関係などが書かれている。

コの字型に長テーブルが3つ。1テーブルにつき、3つの椅子が置いている。

裁判員全員、その部屋で思い思いに過している。

裁判員1号三田健一(47)は時計を見たり、テーブルを叩いたりといらいら状態の様子。2号須藤真澄(34)と3号加藤美樹子(42)の2人は、おしゃべりの真っ最中。4号林葉亮太(22)はDSでゲーム中。5号太田麻衣子(25)は、裁判所所員の渡辺聖子(26)がしているお茶の用意を手伝っている。6号岡本勇次(36)は読書をしている様子。

ゲームに夢中の亮太に、ウキウキと楽しそうに、さまざまな種類のペットボトルを乗せたトレイを差し出す麻衣子。

麻衣子「どれがいいですかあ？」

チラッとトレイを見る亮太。

亮太「ん…、じゃあコーヒーもらいます」

麻衣子「はいどうぞ」

ペットボトルを置き、亮太のやっているゲームに目を向ける麻衣子。

麻衣子「あ！もしかしてそれ、新しいファイナルファンタジー？」

やっとゲーム画面から目を離し、麻衣子に目を向ける亮太。

亮太「ちょっとうれしそうに）うん、そうだけど」

麻衣子「（興味を惹かれたように）へえ…もう出たんだあ」

亮太「好きなの？」

麻衣子「（こみ上げてくる笑みを抑えつつ）え？…まあねえ」

亮太「へえ。太田さんってゲーム好きなんだ」

麻衣子「（意味深に）別にゲーム好きってほどじゃないんだけどねえ…」

麻衣子の態度に興味を惹かれる亮太。

亮太「な～んか意味深だなあ」

麻衣子「（含み笑いをしつつ）別になんでもないわよお」

亮太「ふ～ん」

亮太のそばを離れ、勇次と健一にもトレイからペットボトルを選んでもらう麻衣子。その

後女性陣のペットボトルを補充しに、聖子のいるお茶場に戻る。

ウキウキ気分の麻衣子を見ながら、美樹子と真澄は話をしている。

美樹子「（笑いながら）彼女、昨日なにかあったわね」

真澄「え？」

美樹子「今日は朝から異様にウキウキしてるっていうか、明るすぎない？」

真澄「太田さんっていつも明るくないですか？」

美樹子「（ニヤッと笑って）明るさの種類が違うのよ」

真澄「種類？」

美樹子「（キツパリと）そう。あれは絶対男ね」

真澄「男？」

美樹子「間違いないわ。ついでにいうと、男はゲーム関係の仕事をしてるわね」

真澄「（びっくりして）どうしてわかるんです？」

美樹子「職業柄よ」

真澄「職業？」

美樹子「そう。私、占い師なの」

真澄「へえ、そうなんですか！」

そこへ、麻衣子が美樹子たちの分のペットボトルを乗せたトレイを持ってやって来る。

麻衣子「なんのお話ですか？」

美樹子「太田さんの話」

麻衣子「私？」

座って話に加わる麻衣子。

真澄「加藤さんが、今日の太田さん、いつもよりずっと明るいついていうの」

麻衣子「（笑いが止まらないという感じで）分かります？」

美樹子「そりゃあわかるわよ。全身からウキウキオーラがにじみ出てるもの」

麻衣子「(うれしそうに)やあだあ！」

美樹子「ズバリ、男でしょ」

麻衣子「え?! そんなことまでにじみ出てます?」

真澄「(驚いて)じゃあ、当たり?」

麻衣子「(照れて)ええ…まあ」

真澄「(感心したように)すごいですねえ、加藤さん」

美樹子「(自慢げに)まあね」

麻衣子「なんでわかるんですか?」

真澄「加藤さんって、占い師なんですって」

麻衣子「えっ、マジで?」

美樹子「まあね」

真澄「さっき加藤さん言ってたのよ。太田さんが明るすぎるのは、男の人が関係してるって。おまけにその男の人の職業は、ゲーム関係だって」

麻衣子「(驚きまくって)私のことつけました?!」

ニヤッと笑う美樹子。

真澄「当たってるってこと?!」

麻衣子「(うなづいて)実は昨日の夜、ずっと好きだった人に電話で告白してみたんです! ダメモトだと思ってたんですけど、あっさりOKだったんですよ! その人、ゲームクリエイターなんです!」

真澄「(感心して)へえ…」

美樹子「裁判中は、外部との接触は禁止されてるはずよ」

麻衣子「(興奮して)そんなことより、どうしてわかったんですか?」

美樹子「(苦笑して)そんなことよりって」

麻衣子「じゃあじゃあ、私がなにやってる人だか分かります?」

美樹子「(ため息をついて)そうねえ…(麻衣子をじっと見つめて)中堅企業のOLさんね。入社3年以上の事務職」

麻衣子「すごい…当たってます…」

美樹子「(得意そうに)でしょ」

自分の後ろを指差す麻衣子。

麻衣子「なんか言ってます?」

美樹子「はあ?」

麻衣子「今流行のスピリチュアルなんとかですよ。守護霊とか前世とか、そういうのが教えるんですよ?」

美樹子「(笑って)違うわよ」

麻衣子「違うんですか?」

美樹子「そっ。(こともなげに)こういうことは、どれだけ人のことをよく見てるかってことなの。要は注意力と観察眼の問題ね」

真澄「観察眼？」

美樹子「さっき太田さんが男性陣にペットボトル配ってたのを見て、お茶出しし慣れてるなあと思ったの。おまけにちゃんと、相手の邪魔にならないような場所見つけて置いてたでしょ？ そういうことをわかってるんだなあと思ったわけ。こういうことが無意識にできるようになるには、やっぱり3年以上は必要だと思うのよ」

麻衣子「なんだあ。そういうことだったんですか」

美樹子「スピリチュアルの世界はおいというて、占いなんて、大体はこういうことがベースになってるのよ。いまはカウンセリングみたいなこともするしね」

麻衣子「へえ…。じゃあじゃあ、須藤さんは？」

真澄「私？」

美樹子「(真澄をジッと見つめて)須藤さんねえ…」

真澄「私はいいですよ」

麻衣子「(楽しそうに)別にいいじゃないですか。え〜と、私が思うには…」

美樹子「なに？」

麻衣子「ズバリ大企業の社長秘書！ 上品で頭良さげで、おまけに美人！ 違います？」

真澄「(笑いながら)違います」

麻衣子「本当に？」

真澄「本当に」

麻衣子「なんだあ。結構いい線いってると思ったんだけどなあ」

美樹子「社長かどうかは断言できないけど…」

真澄「…」

麻衣子「(興味津々に)なんですか？」

美樹子にジッと見つめられ、居心地の悪そうな真澄。

美樹子「秘書じゃなくて…妻ね」

麻衣子「つまり、社長夫人ってこと?!」

美樹子「資産家の社長又は大病院院長夫人で、子供は女の子が一人」

麻衣子「えっ！ 須藤さん子持ち？ 見えな〜い」

美樹子「(自信ありげに)違ってる？」

真澄「まあ…(あいまいに笑って)そんなところです」

麻衣子「マジで?! 加藤さん凄くないですか?! いまのはどうしてわかったんです？」

美樹子「それは…」

美樹子が話し出そうとすると、突然健一の大声が、お茶の後片付けなどをしている聖子を呼ぶ。

健一「(イライラと)おい！ ちょっとあんた！」

突然の大声で、皆は驚いて健一を見つめる。

聖子「なんでしょう」

健一「いったいいつまで待たせれば気が済むんだ」

聖子「はあ…」

健一「はあじゃないよ！」

聖子「…すいません」

健一「判事たちはいつ来るんだ」

聖子「まもなくいらっしゃると思いますので、もうしばらくお待ちいただけますか？」

健一「(嫌みったらしく)もう十分待ったと思うけどね」

聖子「…申し訳ありません…」

健一「(ため息)全くどうなってるんだよ。評議室に入ってから、もう30分以上も経ってるんだぞ。俺はな、暇を持って余してここに来てるんじゃないんだよ。こんなことさっさと終わらせて、早く家に帰りたいんだよ」

聖子「申し訳ありません。いま見てまいります」

健一「(大げさにため息をつき)ったくそういうことは言われる前に行動しろよ。あんたはなんのためにここにいるんだ？ ペットボトルを配るためか」

健一の嫌味を背中で聞き、そのまま階段を上がって行く聖子。

読んでいた本を閉じ、健一のところに行く勇次。

勇次「まあまあ三田さん、落ち着いて」

階段に向かう聖子。

健一「…」

勇次「気持ちは分かりますけど、評議が始まらないのは彼女のせいじゃないんですから」

健一「そういうことを言ってるんじゃない」

勇次「彼女はここの所員であって判事じゃないんですから、ああいう言い方は可哀想ですよ」

健一「評議の進行をスムーズに行うのも、所員の仕事だと思うがね」

勇次「それはそうかもしれませんが」

困ったような勇次に、吐き捨てるように言う健一。

健一「だから女はダメなんだ」

勇次「えっ？」

健一「所員が男だったら、俺に言われる前にとっくに判事の様子を見に行ってるよ」

勇次「…はあ」

健一「俺はそれを注意しただけなんだよ。なのになんで俺が、あんたに責められなきゃならないんだ？」

勇次「別に責めてるわけじゃないですよ」

健一「じゃあなんなんだよ」

勇次「これから私たちは、大事な評議をしなきゃならないんです」

健一「だから？」

勇次「下手にイライラしたら、まとまるものもまとまらないですよ。それでまた帰るのが遅くなったら、あなただって嫌でしょ？」

健一、勇次を睨みつける。

健一「いいか？ 所詮女はバカばかりだ。裁判所の職員なんていう大層な仕事は男に任せて、バカな女は家にいればいいんだよ。俺はそれを親切で教えてやったんだ。あの女から礼を言

われても、責められるいわれはないね」

声高に言い募る健一に、困惑する勇次。

亮太「(ちょっと面白がって)こええ…」

じろっと亮太を睨む健一。

睨まれ、肩をすくめる亮太。

小声で真澄たちに話しかける麻衣子。

麻衣子「(怒って)なんなんですかね、あの言い方！ 超むかつく！」

真澄「相当イライラしてるみたいね」

美樹子「…ちょっと」

麻衣子「はい？」

手で合図をして、2人を自分の周りに集める美樹子。

興味津々で3人を見つめる亮太。

以下3人、小声での会話。

麻衣子「(健一に怒ったまま)なんですか？」

美樹子「実は三田さん、奥さんが家を出て行っちゃったみたいなのよねえ」

真澄「(驚いて)えっ？」

麻衣子「三田さんの全身から、そんなことが?!」

美樹子「(笑って)違うわよ」

麻衣子「じゃあ、どうして知ってるんです？」

美樹子「実はね、この前偶然裁判所の廊下で、三田さんが、奥さんらしき人と電話してるの聞いたのよ」

麻衣子「電話？」

真澄「(苦笑して)みんなしてるのね、外部接触」

ちょっと肩をすくめる麻衣子。

麻衣子「(興味津々で)で、なんて言ってたんです？」

美樹子「そうねえ…『だからお前は馬鹿なんだ』とか、『一人でやっていけるわけないだろ』とか、『男と一緒にだろ？ そいつを出せ!』とかね」

麻衣子「うわあ…めっちゃめっちゃ生々しいですねえ…」

真澄「本当…」

美樹子「私の観察眼によれば、三田さんの性格に耐えられなくなった奥さんが、出会い系サイトで知り合った8歳年下のイケメン男と、全財産を持ち出して駆け落ちした、とこんなところだと思うわ」

真澄「(感心して)そこまでいくと、すでに占いの域超えてますね」

美樹子「相当高い確率で当たってるはずよ」

麻衣子「旦那があんな性格だったら、奥さん出て行って当然ですよ。むしろよく結婚できたって感じじゃないですか？」

美樹子「(うなづいて)ああいう人に限って、奥さんいないと一人じゃなんにも出来ないってこと、多いのよねえ」

麻衣子「そうそう、『靴下どこだ？ ハンカチないぞ〜』って(小声のまま突っ込み)自分で探せっちゆうねん！」

美樹子「早く終わらせて奥さん迎えに行かないと、自分が困るのよ」

真澄「あのイライラは、そういうことなのかしら」

麻衣子「絶対にそうですよ」

無然としたまま座っている健一を、ゆっくりと振り返る3人。

一階の明かりが、徐々にF・O。

クロスして二階部分に、明かりがF・ILしてくる。

一階にいる人々は、各々そのまま行動をしている。

判事執務室。

小さなテーブルと椅子があり、中谷悟(48)が椅子に座っており、その横に藤井俊也(37)と河合千秋(31)が立っている。千秋はメガネを掛けている。

千秋「中谷さん、そろそろ行かないとまずいんじゃないでしょうか」

悟「(やる気なさそうに)分かってるけどさあ…」

千秋「皆さん相当お待ちですよ」

悟「だから、分かってるっていつてるじゃないか」

俊也「河合君、中谷さんは、分かってるっておっしゃってるじゃないか」

千秋「しかしですね」

俊也「しかしも案山子もない！ 中谷さんが分かってるっておっしゃってるんだ。なにが不満なんだね？ ねえ中谷さん」

悟「しかしも案山子もない…いやあ、そのフレーズ久しぶりに聞いたよ。いいねえ、なんかレトロな感じでさ」

俊也「喜んでいただけて光栄です！」

大きく溜息をつく千秋。

悟「藤井君は、いつもぼくを元気にさせてくれるねえ」

俊也「それが私の役割だと考え、日々精進を重ねておりますから」

千秋「(小声で)どんな役割なのよ…」

俊也「なんか言った？」

千秋「いえ、別に」

咳払いをし時計を見る千秋。

千秋「とにかくですね、いつまでもここにいたって仕方ないじゃないですか」

悟「そうなんだけどさあ…」

千秋「…(ため息をついて)いったい裁判員制度のなにが気に入らないんです？」

悟「だからあ、何度も言ってるじゃないか、あいつら全員素人なんだぞ！」

千秋「だからなんなんです」

悟「いいか、素人に裁判のなにが分かるって言うんだよ」

俊也「その通りです、中谷さん！」

悟「だろ？」

俊也「素人に裁判やらせてどうしようって言うんですかねえ」

悟「そうそう。裁判なんていう高度で複雑なものは、しっかりとした教育を受けてきた、我々プロに任せてればいいんだよ」

千秋「そんなこと言ったって、もう裁判員制度は始まっているんだから仕方ないじゃないですか」

悟「あいつら素人は、ろくに法律も知らないんだぞ。そんなやつ何人集めたって、正しい判断なんか出来るわけじゃないか」

俊也「その通りです！」

悟「おまけに陪審員制度と違って、有罪になれば量刑だって決めるんだぞ」

千秋「だからわれわれ判事が一緒になって、評議していくんじゃないですか」

悟「(溜息)いいか、河合君」

千秋「なんでしょうか？」

悟「今回の被告人、可愛かったよな」

千秋「いきなりなにを言い出すんですか?!」

俊也「やっぱりそうお思いになりましたか！」

悟「君もそう思っただろ？ 藤井君」

俊也「思いました！ 思いましたとも！ やっぱり若い殺人犯っていうのは、色っぽくていいですねえ。おまけにクラブのダンサーですから、スタイルも抜群ですよ」

千秋「(怒って)藤井さん！ それセクハラです！ それにまだ、殺人と決まったわけじゃありませんよ！」

悟「いやいや河合君、落ち着いたまえ。いいかね、そこが重要なところなんだよ」

千秋「…(いぶかしげに)どういうことでしょうか？」

悟「つまりだ、素人というものは、いかんせんそういう外見的なところに惑わされてしまうものなんだよ」

千秋「はあ？」

悟「今回の被告人は大層可愛らしい。たぶん男の裁判員は、全員被告人の味方になるに決まっているんだよ」

千秋「…(疑って)そうでしょうか？」

悟「考えてもみなさい。被告人が今回みたいな可愛い子じゃなくて、ゴリラそっくりの、毛むくじゃらなバカでっかい大男だと想像してみなさい。同じ犯罪でも全然印象が違ってくるだろ？」

俊也「(感心したように)誠の中谷さんのおっしゃる通りです」

悟「素人というものは、そういう見た目の印象に騙されやすいものなんだよ」

千秋「それは…そうかもしれませんけど」

俊也「そういえば、この制度が始まる前の、第16回模擬裁判で、そういうことありましたね」

悟「そう！ ぼくはさっきからそのことを言ってるんだよ。さすがは藤井君だ」

俊也「お褒めに預かり恐縮です！」

悟「いいかね河合君。君も見ただろう？ 証拠は全て無罪を指し示してるのに、あの4号のおぼちゃんがなんとやったか」

千秋「…ええ、まあ…」

俊也「確か、『この被告人は2年前に別れた亭主にそっくりです。こういう顔の男は、必ず浮気をするし、暴力も振るう。だからあいつがやったに決まっています！』でしたね」

悟「そう！ いいかね、浮気をして暴力を振るっていたのは、元亭主であって被告人じゃないんだよ。素人っていうのは、そういう論理的な考え方が全く出来ないんだよ。違うか？」

俊也「結局4号のおばちゃんが譲らなくて、評決不一致に終わったんですね」

悟「(嫌そうな顔で) そうだ。いいか君たち！ この裁判は模擬じゃないんだ。もし評決不一致なんてことにでもなってみろ、マスコミが騒ぎ立てるに決まってるじゃないか」

俊也「中谷さんのお心、本当によく分かります！」

千秋「だからって、いつまでもここにいたところで、なんの解決にもならないじゃないですか」

悟「だからあ、心の準備をしてるんじゃないか。だいたい君は、この裁判がどういう意味を含んでいるのか分かってるのかね？」

千秋「意味…ですか？」

悟「そうだ。考えてもみなさい。この裁判は、裁判員制度が導入されてから、数えて6つ目の裁判だね」

千秋「それがなにか？」

悟「ただし、今までの5つの裁判と今回の裁判では、大きく違う点が一つだけある。君には分かるね、藤井君」

俊也「もちろんです」

千秋「あの…」

分からない様子千秋を見て、ため息をつく悟。

悟「教えてあげなさい、藤井君」

俊也「(咳払いをして) 前の5つでは、人が死んでない」

悟「そう！ さすがは藤井君だ」

俊也「ありがとうございます」

悟「つまり、裁判員制度が導入されてから、今回が初めての殺人事件なんだよ！」

千秋「だからなにか？」

俊也「(びっくりして) これだけ言ってもまだ分からないのか！」

千秋「はい」

俊也「(呆れかえって) つまりだね、マスコミや世間の注目度が、今までと全く違うってことなんだよ。

だからもしこの裁判で、評決不一致なんてことにでもなってみろ、裁判長としての中谷判事の能力が疑われ、中谷さんのこれからの人生に傷が付くんだよ！」

悟「その通りだよ、藤井君」

俊也「その代わり、世間が納得するような、見事な評決に達してみたまえ。このあの中谷さんの人生は薔薇色、つまり『ラビアンローズ』なんだよ！」

千秋「(呆れて) ラビアンローズって…」

俊也「だから中谷さんが、ほんの少しナイーブになられて、ここで心の準備をするのは当然のことなんだよ。君だって、ここまで説明されれば分かるだろ？」

悟「(感心しきって)本当にいいことを言うねえ、藤井君。君は僕の心のオアシスだよ」

俊也「(恐縮して)そんな、至極当然のことを言ったまでです」

悟「ぼくが上に上がったあかつきには、もちろん君にも頑張ってもらうからね」

俊也「精一杯お手伝いさせていただきます！」

千秋「……」

唐突にノックの音が聞こえる。

千秋「はい」

聖子(声)「あの…皆さん大分お待ちなんですが」

千秋「中谷さん」

悟「(大きな溜息)あ～あ……」

嫌そうに顔をしかめる悟。

2階部分の明かりが消え、また1階の部分に明かりが点る。

各々いろんなことをしているが、麻衣子だけがトイレに行っていない。

美樹子「それにしても、本当に遅いわねえ」

真澄「ええ」

亮太「俺、見てきましょっか」

真澄「勝手に動き回ってもいいのかしら？」

美樹子「いいのいいの。こんなに待たせる方が悪いのよ」

真澄「まあ、そうですねえ」

亮太「(笑って)じゃ、ちょっと行ってきます」

美樹子「お願い～い」

亮太が様子を見に行こうとすると、悟、俊也、千秋と、中くらいのダンボールを持った聖子が階段から降りてくる。

悟「(悪びれずに明るく)いやあ皆さん、お待たせしてしまっ」

健一「(不機嫌に)ずいぶん遅かったじゃないか」

俊也「諸々準備があったものですから」

健一「俺達は暇を持て余してここに来てるわけじゃないんだぞ！」

千秋「申し訳ありません」

勇次「まあまあ、これで評議が始まりますから、あとちよつとの辛抱ですよ」

健一「(ぶつぶつと)全くこれだから公務員はダメなんだよ。一体誰のおかげで飯を食ってると思ってるんだ」

勇次「三田さん」

自分の席に着きながら、俊也に文句を言う悟。

悟「(俊也に小声で)なんなんだね、あの失礼な男は」

俊也「ここは我慢です、中谷さん。我々を『ラビアンローズ』に導いてくれるかもしれない男ですからね」

悟「(しぶしぶ)まあ…そうか……」

悟たち、席に着く。聖子はダンボールを後ろのテーブルに置き、その近くに座る。

麻衣子がないことに気付く千秋。

千秋「一人足りませんね」

俊也「なんだって？」

聖子「5号の太田さんがいらっしやいません」

真澄「太田さんなら、さっきトイレに行きましたけど」

悟「(嫌そうに)トイレ？ これから評議を始めようって言うのに、トイレですか？」

真澄「ええ……」

悟「これじゃあ評議が始められないじゃないか」

俊也「(憤った感じで)全くですねえ」

千秋「すみません渡辺さん、見てきていただけますか？」

聖子「ただいま」

美樹子「(小声で)なにあれ。自分たちが遅れてきたんじゃないの」

亮太「(笑って)あれだけ待たされれば、トイレくらい行きますよねえ」

美樹子「全くよ」

聖子が様子を見に行こうとすると、ハンカチで手を拭きながら麻衣子が入ってくる。

聖子「(麻衣子に)評議が始まりますので、お席にお着きください」

麻衣子「(悟に気付き、可愛い子ぶって)ごめんなさ〜い。お待たせしちゃってえ」

悟「(突然上機嫌になって)いやいや、全然いいんですよ。トイレなんて、誰だって行くものなんですからね」

麻衣子「判事さんって優しいんですね！」

悟「(ニヤニヤと)いやいやハハハ」

ゆっくりと自分の席に向う麻衣子。

小声で俊也に話しかける悟。

悟「(麻衣子を見て)法廷内は暗いから気付かなかったけど、結構可愛い子じゃないか」

俊也「(嬉しそうに)今まさに『ラビアンローズ』です！ 中谷さん」

悟「(嬉しそうに)全くだねえ、藤井君」

千秋「中谷さん」

咳払いをする悟。

悟「これで全員揃いましたね」

聖子「はい」

悟「それではこれより、事件番号平成21年、合(わ)第453号、実母殺人被告事件の評議をはじめさせていただきます。私が裁判長を務めさせていただく中谷悟です」

悟が目で合図を送ると、俊也と千秋と聖子が順番に挨拶をする。

俊也「裁判官の藤井俊也です」

千秋「同じく裁判官の河合千秋です」

聖子「記録係の渡辺聖子です」

悟「進行は、藤井君にお願いしましょう。皆さんよろしいでしょうか？」

裁判員一同頷く。

俊也「それでは進行を担当させていただきます。もう皆さん、お互いお分かりだと思いましたが、一応1号の方から順番にお名前をお願い致します」

一人一人、椅子から立ち上がり、挨拶をする。

健一「…1号の三田健一です」

真澄「2号の須藤真澄です。よろしくお願いします」

美樹子「3号の加藤美樹子です」

亮太「4号の林葉亮太で～す」

麻衣子「5号の太田麻衣子です。どうぞよろしく」

勇次「6号の岡本勇次と申します」

勇次が席に着くと、

俊也「皆さん、どうぞよろしくお願い致します」

全員「(口々に)よろしくお願いします」

俊也「それではまず、一度評決を取り、そののち、評決結果を踏まえて評議を進めたいと思うのですが、いかがでしょうか？」

全員、お互いの顔を見つつ頷く。

俊也「ではこれより、第一回目の評決を取らせていただきます」

明かりF・O。暗転。

続きはあらすじ(ホームページ内 <http://www.supercomplex.net>)をご覧ください。